



Medical

この数年、医療界で 注目を集める“性差医療” 私たちにどう関係するの？

ナビゲーター



医療ジャーナリスト・写真家
伊藤隼也さん

いとう・しゅんや 国内外問わずさまざまな医療現場を積極的に取材。「とくダネ!」(フジテレビ系)でメディアカルアドバイザーを務めるほか、多数のメディアを通じ、患者目線の情報を発信。05年には「編集者目線」誌で「編集者目線」大賞を受賞。

男性のデータで女性を診察する医療の現実
突然ですが、医療界で注目されている「性差医療」という言葉を知っていますか？「性差医療」とは、80年代にアメリカで着目され、90年代に広まった、男性と女性で異なる医療が必要だという考え方で、これまで男女は、生殖器官以外は生物学的にほとんど差がないと考えられていました。現に、今行われている一般的な診療での投薬などは、ほぼ男性のデータを基準にしている。女性は月経周期など

と女性ホルモンの変動に伴って体温や体調が変化し、安定した研究がしづらいという背景があり、仕方がない面もありました。ところが、医学の進歩によって、同じ病気でも男女で症状が異なる場合があったり、根本的にかかりやすい病気が違うなど、性別による差が明らかに。男性と女性では遺伝子をはじめ、骨格や筋肉も違えば、分泌されるホルモンも完全に別物。そのため、性別によって異なる医療を講ずることが求められるようになったのです。ちなみに、産科や婦人科は、性

Column

意外と知られていない新事実/ 女性になりやすい症状を Pick up!

冷え性

季節や体温の高低に関係なく、体の一部分や全体が冷えて不快感を感じる症状のこと。ナマ肌や凍傷などのせいかもしれない。根本的な原因は筋肉不足。女性はやせ型、ぽっちゃり型などの体型にかかわらず、エネルギーを熱に変える筋肉が少なく、男性よりもどうしても体が冷えやすい。温かい飲み物や厚着をする対応療法よりも、軽めのダンベルなどを使った筋トレが効果的!

下肢静脈瘤

下肢(脚)の静脈血の逆流を防止する弁が、うまく機能しなくなると血液がたまってしまふ疾病。コブがゴツゴツ出るといわれるイメージだが、実はコブのない「隠れ」下肢静脈瘤もあり、もともとふくらはぎの筋肉・ひくろ筋の働きが強い女性に多い。ハイヒールばかりを履くという生活習慣でも悪化し、そのい部分が圧迫されやすい妊婦中も要注意。ふくらはぎの筋肉を定期的に動かす心がけを。

オンナの病氣 新常識



詳しくはこちら/
「オンナの病氣
新常識」
(講談社・¥1,575)

「性差」に注目し、女性特有の病氣やかかりやすい病氣を専門医に徹底取材、今まで知らなかった新常識が満載。男性版も発売中。

Key Word

これからはどんどん減る一方…
“女性ホルモン”って何者!?



性差医療を考える上で外せないのがエストロゲン(卵巣ホルモン)という女性ホルモン。エストロゲンは女性の体調を左右するもので、初潮から閉経までの間、骨密度や自律神経を安定させるほか、肌の潤いや髪をツツツに保ってくれる頼もしい存在。ただ年齢とともに量が減ってくと、それまで隠れていた体の不調が出やすい。分泌量の多い30代でも、ホルモンはストレスの影響を受けやすいので、たのまないように注意して。